

身近な人々とかかわる力を育む学習活動の展開

～「さつきのじまんフェスティバル」の活動を通して～

那覇市立さつき小学校教諭 下地利江子

テーマ設定理由

今日、子どもを取り巻く環境は、少子化や核家族などの社会の変化に伴い、人とのかかわりが希薄になりつつある現状である。

このような社会情勢を受けて、小学校学習指導要領解説生活編に、「児童が身近な人や社会・自然と直接かかわる活動や体験を一層重視し、地域の環境や児童の実態に応じて創意工夫を生かした教育活動の改善を図る」と明記されている。このことは、「子どもが十分に身近な人々と触れ合いかわっていくことを大切にしたい学習活動を展開することにより、自分のよさに気づき相手を思いやる気持ちが育つことで、これからの社会を生きていく力になる」と捉えられる。

日常の学校生活において担任と子どものかかわりで、子どもは教師が挨拶しても返事がなかったり、授業中質問したことに対して応答がなかったり等、子どもの意思表示がない時がある。また、友達同士や1年生とのかかわりにおいても、自分の思いや願いをうまく伝えられず、集団の中に入れなかったり相手の考えや思いを素直に受け止められない子どもがいる。

さらに、1学期の生活科学習で「まちの自然や施設、人々に積極的にかかわろうとする力」の育成をねらいとした校区探検を実践したが、子どもは地域の人々に対して、挨拶や聞き取りがうまくいかず、単元のねらいが十分に達成できなかった。このことは、子どもが身近な人々とかかわり合う力が身に付いていないためだと考える。

身近な人々とかかわる力を育むためには、子どもが身近な人々と繰り返しかわることが大切である。このことが、子どもに生活上必要な習慣や技能を育み、身近な人々とうまく接することができると思う。

そこで、生活科の単元を通して身近な人々とかかわりの具体例として自分と友達、自分と教師、自分と友達の家族及び自分と地域の人々を取り上げ、身近な人々とかかわりに重点をおいた具体的な学習活動の展開を研究することで「身近な人々とかかわる力」が身に付いていくと考え、本研究テーマを設定した。

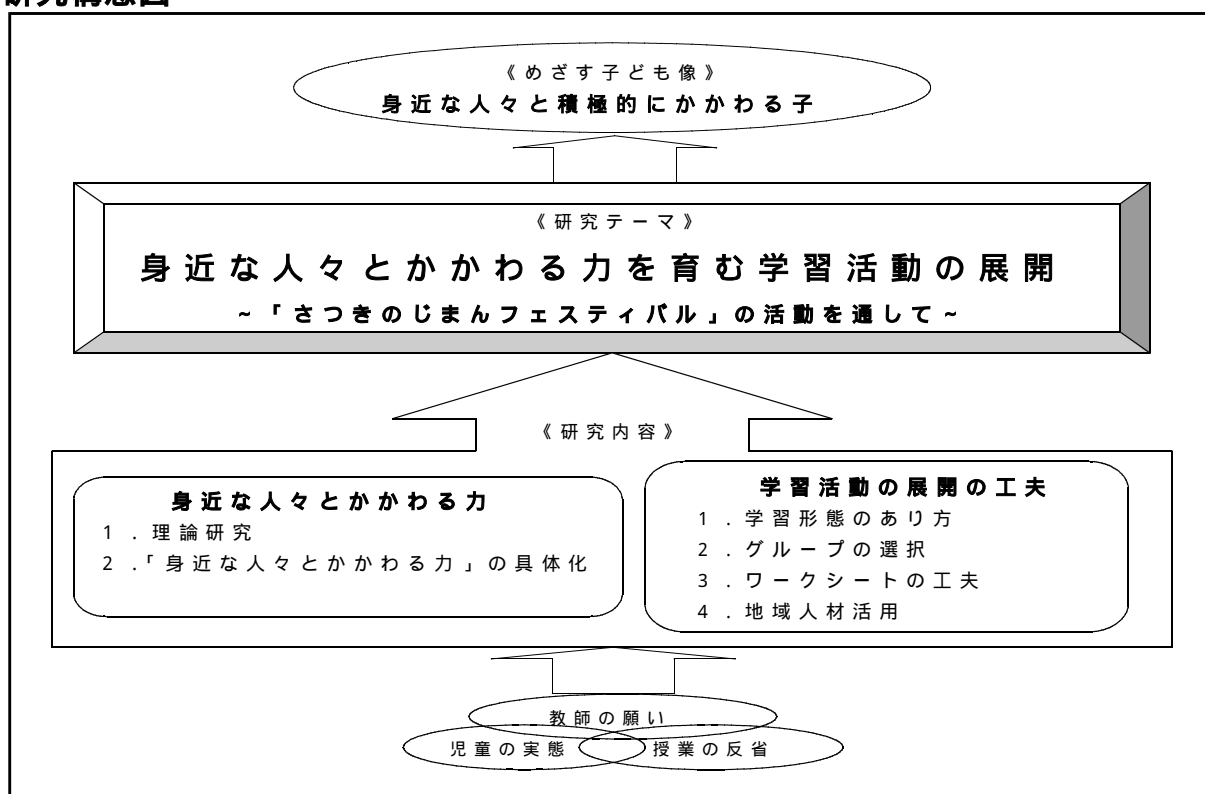
研究目標

生活科単元「さつきのじまんフェスティバル」の学習活動を通して、子どもに身近な人々とかかわる力を身に付けさせるための学習活動の展開について研究する。

研究方針

- 1 生活科における「自分と身近な人々とかかわり」について理論研究する。
- 2 具体的な学習活動の展開の工夫について研究する。

研究構想図



研究内容

1 身近な人々とかわる力

(1) 生活科の目標におけるかわり

小学校学習指導要領生活科教科目標に「自分と身近な人々，社会及び自然とのかかわりに関心を持ち，自分自身や自分の生活について考えさせるとともに，その課程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ，自立への基礎を養う」とある。このように生活科における学習は，子どもが自分とのかかわりの中で，身近な人々，社会，自然に取り組む活動が展開される。さらに，身近な人々と直接かわることによって，集団や社会の一員として自分のあり方を考えたり，人と適切に接したりできるようにすることが，自立への基礎を養う上で重要であると考え。

(2) かわりの広がりや深まり

身近な人々とかわる力を育むには，かわりの広がりや深まりを重視しなければならない。今までの経験を生かしながらかかわる対象を広げていくと，これまでになかった気づきが芽生える。さらに，対象と繰り返しかわることによって対象への興味・関心が増し，自分と対象に深まりがでる。このような過程を通して，身近な人々とかわる力が身に付くであろうと考える。

そこで，本研究ではかわりを4つの視点に広げ，繰り返しかわらせることで子どもに身近な人々とかわる力を身につけさせる。さらに，身近な人々とかわる力を生活上必要な習慣や技能と捉え，日常生活で生かすことができるよう具体化する。「小学校学習指導要領解説 生活編」(文部省)によると，生活上必要な習慣と技能とは，「基本的には自分のことが自分でできる，よりよい生活者になるために必要な習慣や技能である」としている。

そこで、本研究では「さつきのじまんフェスティバル」の単位を通して身近な人々とかかわる力を図1のように具体化する。

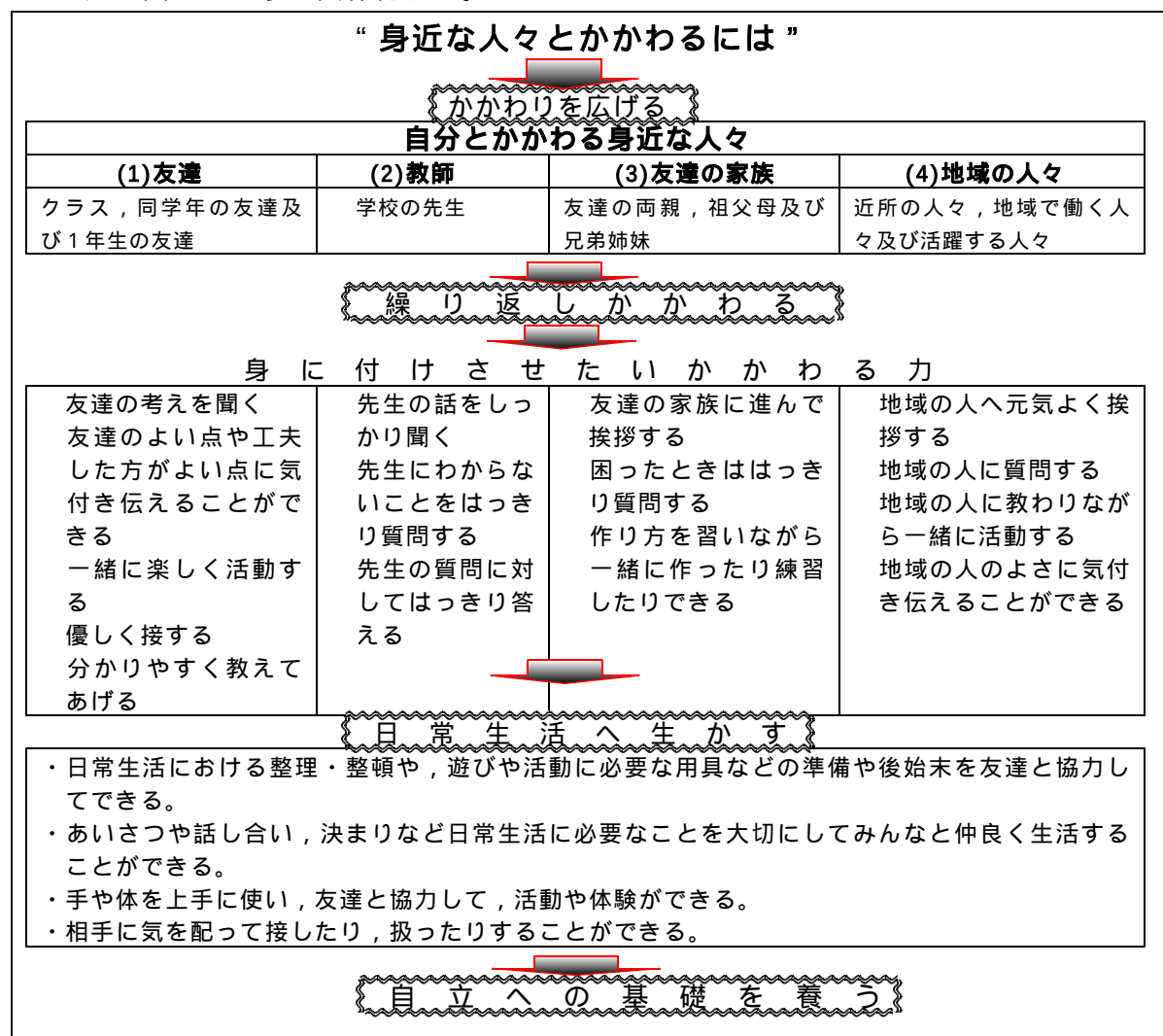


図1 「身近な人々とかかわる力」の具体化

2 身近な人々とかかわる力を育む学習活動の展開の工夫

(1) 具体的な活動や体験の展開の工夫 学習形態の工夫

本単元は、学年全体で取り組むこととする。子どもは、学級以外の友達と同じ体験や活動する等、友達同士でかかわることにより、自分と友達のかかわる力が身に付くであろうと考える。また、かかわる対象が、大人（教師、友達の家族、地域の人々）であっても同様で、より親しみが増し、同じ体験や活動を共有できる。すなわち、身近な人々と繰り返し積極的にかかわることにより、身近な人々とかかわる力が身に付いていくであろうと考える。

グループの選択

本単元の第2時において、「まつり」と「さつきのじまん」について調査を行う。調査は、学年全体で話し合い形式をとり、自分がやってみたい出し物のグループを選択させる。各グループによる人数のばらつきがあることも予想される。しかし、学年全体で活動することにより、同じ思いや願いを持つ子ども同士が集まり、やってみたいことが実現できる。

このことで、子どもは学級単位のグループより身近な環境や自分についての気付きが膨らみ、身近な人々とかかわる力が身に付くであろうと考える。

ワークシートの工夫

身近な人々とかかわる力をつけるため、子どもが自分自身を振り返るワークシート（図2）を作成した。その内容は子どもが短時間で自己評価できるようにして、さらに身近な人々とかかわりについては記述式で具体的に書かせる。教師は、子どもがワークシート記入後、子どもの気付きを見取り、コメントを入れて本人に返す。子どもは教師のコメントにより、身近な人々とかかわりに気付き、その関係を深めていこうとする意欲につながると思う。

図2 ワークシート例

(2) 人材活用の工夫

本単元では、子どもがより多くの人とかかわることができるよう、表1の人材を依頼し、配置した。かかわる力を以下の人材により育み、学習活動を展開する。

表1 各グループの人材活用とかかわり

グループ	かかわらせる人々
獅子舞	・獅子舞、衣装の着付け指導→宇大嶺自治会館獅子舞保存会 ・基本動作の指導→さつき小、金城小、宇米原小の高学年児童
旗頭	・旗頭の持ち方、衣装の着付け指導、練習用の竿貸し出し→鏡水青年会 ・衣装の着付け援助→本校事務職員
ムーチー	・ムーチーの作り方指導（フェスティバル前日）→ 2 学年保護者及び祖父母
食べ物	・家庭にて、親子でお菓子作り→ 2 学年保護者及び祖父母
遊び	・製作活動→ 2 学年を中心とする本校職員及び保護者
コンサート	・発声指導、リハーサルや本番でのピアノ伴奏→本校音楽専科教諭
エイサー	・踊り指導→校区内の子供会担当者 ・カチャーシー指導→ 2 学年保護者
モノレール	・ゆいレール展示場内案内→沖縄都市モノレール会社職員 ・ゆいレール乗車体験→各家庭

3 身近な人々とかかわる力の具体的な評価について

生活科の評価は、教科の目標に照らして設定された「生活への関心・意欲・態度」「活動や体験についての思考・表現」「身近な環境や自分についての気付き」の3観点でおこなう。

本単元における具体的な評価規準表（表2）を作成した。

表2 本単元における評価規準

単元名 「さつきのじまんフェスティバル」 2 1 時間		
評価規準の具体化		
関心・意欲・態度	思考・表現	気付き
○地域の祭りや行事に関心をもち、それらに関係する人々と積極的にかかわり、フェスティバルの準備をしようとしている。	○獅子舞やエイサーの踊り方及び旗頭の持ち方を教わりながら自分なりに工夫することができる。 ○友達と出し物の計画を立てたり出店について自分や友達の家族と工夫して作ったことを、表	○フェスティバルの準備や本番に参加しながら、自分と身近な人々のよさに気付いている。

	現することができる。	
フェスティバルの準備についての話し合いに参加しようとしている。 グループで協力しながら、進んで活動しようとしている。 1年生やお世話になった人々を楽しませようとしている。	フェスティバルの準備を友達と協力して工夫しながら進めようとしている。 お世話になった人々を呼んで感謝の気持ちを伝えることができる。 フェスティバルを終えた後の感想や思いを表現できる。	フェスティバルは、みんなと協力して作り上げることが分かっている。 フェスティバルを通して、自分や身近な人々のよさに気付いている。 自分が、身近な人々とかかわっていることを分かっている。

授業実践

1 単元名 さつきのじまんフェスティバル

2 単元目標

- (1) これまで体験した行事や地域で見聞きした行事を参考にして、自分たちのフェスティバルを企画することができる。(関心・意欲・態度)
- (2) フェスティバルに必要な物を工夫し、身近な人々と協力して準備する。(思考・表現)
- (3) お世話になった人々や1年生とかかわる中で、自分や身近な人々のよさに気付くことができる。(気付き)

3 単元について

(1) 教材観

本研究は、子どもが様々な場所で多様な人と接したりする中で、それらが、自分の生活とかかわっていることがわかり、地域に親しみをもち、人々と適切に接することが出来るようになることを目標としている。楽しいフェスティバルにするためには、友達と協力して準備する大切さを学んでほしい。また、単元全体を考えると、教師の支援だけでは活動の広がりや深まりに限度がある。そこで、地域の方々や保護者の方々にも繰り返しお世話になる中で、身近な人々とかかわりを深めさせたい。

(2) 児童観(平成17年10月19日実施 おまつりアンケートより)

本単元実施前にまつりに対する認識や興味・関心について事前調査を行った。その結果、子どもの関心は高く、実際にまつりに行って楽しんだ経験が多いことがわかった。

また、まつりの手伝いをしたり出し物に参加する等の経験が少ないこともわかった。さらに、「もし、まつりに参加できるのであれば出店をしたりエイサー等をやってみたい。」の思いを8割の子どもが持っていた。やってみたいことについては、綿菓子等の出店が多く、次に、郷土色豊かなエイサー、旗頭、大綱引き等の実演であった。このことから、子どもがなんらかの形で地域行事に参加している様子がわかると同時に、子どもを取り巻く地域の人々の姿もみえてくる。そこで、本単元では、子どもの身近な人々を活用し、フェスティバル本番に向けて取り組む過程の中で、身近な人々とかかわる力が身に付くであろうと考える。

(3) 指導観

本単元の展開にあたり、下記のこと留意し支援していく。

活動を通して身に付けさせたいこと

「計画を立てよう」(3時間)では、話し合い活動が中心で、子どものまつりに対する思いを語らせるようにしたい。そのためには、子どもの思いを事前にしっかりと理解

しておくことが大切である。その手立てとしてワークシート等に自分の思いを書く時間を確保したり、折に触れ、子ども自身から話を聞くようにする。子どもの話を聞くときは、子どもが自分の思いをのびのび語れるよう、教師は共感的に接するようにする。

また、招待したい人々について話し合う場を設定する。家族やお世話になった人々への感謝の気持ち及び1年生を楽しませてあげたいという気持ち等を持たせる。

また「フェスティバルを楽しもう」(5時間)では、「フェスティバルを楽しみたい」「招待する人を楽しませたい」という子どもの思いを大切にしてい取り組ませる。

地域とのかかわり

フェスティバルの計画を立てる段階で、子どもによっては「もっと～したい」という思いが強くなる時もある。その時は、教師は粘り強く取り組む子どもの姿を見取る姿勢が大切であると考えられる。

しかし、教師の支援だけでは、活動の広がりや深まりに限度がある。そこで、身近な人々(ここでは地域人材及び保護者)に授業に参加してもらい、作り方や踊り方を教わり、共に活動する中で身近な人々とかかわる力を深めさせる。

子どもの変容に対する評価

子どものまつりに対する思いは、多岐にわたるが、教師はそれを受け止め、共感的に理解する必要がある。子どもが自分の目標に向かい、考え、解決していこうとする過程を教師はしっかりと見取り、一人ひとり进行评估していく。

子どもをしっかり見取るためには、教師が子どもの行動やつぶやき等、はっきりとした着眼点をもって子どもの活動を観察することが重要である。そして、その見取りを評価に生かす。評価の際には、本研究のテーマである「身近な人々とかかわる力」を、(1)自分と友達 (2)自分と教師 (3)自分と友達の家族 (4)自分と地域の人々の4つの観点からかかわりを広げ、指導計画の中に取り入れる。

4 指導計画(単元構想) 総時間 21時間 表中の数値(身近な人々とかかわる力)については、図1を参照

単元	活動の流れ	教師の支援・手立て	-----評価規準の具体例----- 評価方法	身近な人々とかかわる力
計画を立てよう 3時間	1. 町探検で見つけた、地域のイベントについて振り返り、自分達の学校にしかない宝物について話し合う。 2. フェスティバルでやることや、必要な準備について話し合う。	○校区探検のまとめの頃から祭りを自分たちもやってみよう、自分たちにも出来そうだという思いが育つような声かけをしていく。 ○地域のイベントについてのポスターやビデオで、振り返りのきっかけ作りをする。	フェスティバルの準備についての話し合いに参加しようとしている。 【関心・意欲・態度】 フェスティバルは、みんなと協力して作り上げることが分かっている。 -----【気付き】----- 発言分析、行動観察 ワークシート	(1)友達 - (2)教師 -
準備をしよう 13時間	1. 分担したグループに分かれて各コーナーや出店の内容を相談し、必要な物を製作したり、身近な人々から獅子舞やエイサーの踊り方、旗頭の持ち方や作り方を教わったりする。	○地域や父母に、協力依頼の連絡を電話や文書にて事前に行う。 また、校内の職員へも協力依頼しておく。	グループで協力しながら進んで活動しようとしている。 【関心・意欲・態度】 フェスティバルの準備を友達と協力して工夫しながら進めようとしている。 【思考・表現】	(1)友達 - (2)教師 - (3)友達の家族 - (4)地域 -
	2. 招待者について学年全体で話し合う。	○当日、招待する人(お世話になった地域のボランティア	フェスティバルの準備についての話し合いに参	(1)友達 -

準備をしよう 13時間		ア、父母、校長等）について話し合う時間を設ける。	加しようとしている。 【関心・意欲・態度】	(2) 教師 -
	3. フェスティバルの全体で必要なものを手分けして準備する(プログラム、招待状など)	○これまでの活動を振り返らせ、司会進行係等を選出させる。	フェスティバルは、みんなと協力して作り上げることが分かっている。 【気付き】	(1) 友達 - (2) 教師 -
	4. 互いに見合い感想を語り合う場を(リハーサル)設ける。【本時】	○友達の作品のよい点や工夫した方がよい点について話し合い、フェスティバルを成功させるためのリハーサルであることを確認する。	フェスティバルを通して、自分や身近な人々のよさに気付いている。 【気付き】 発言分析、行動観察 他者評価	(1) 友達 - (2) 教師 -
フェスティバルを楽しむ 5時間	1. 招待状を届けオープニングの会の役割分担をする。	○これまでの活動を振り返り、お世話になった方々へ感謝する気持ちを忘れてはいけないことを助言する。	1年生やお世話になった人達を楽しませようとしている。 【関心・意欲・態度】	(1) 友達 - (2) 教師 -
	2. 1年生へ、各グループがどんなことをするかコマーシャルタイムを設定してみせる。 3. 体験コーナー、ゲームコーナー、遊びコーナー、食べ物屋さんなど、自分の役割を果たし、来てくれた人を楽しませたり、いろいろなコーナーをまわって楽しんだりする。	○地域ボランティアや父母へフェスティバル当日の日程を事前に知らせる。 ○できるだけ、どのコーナーにもお客が行くように、お客の少ないコーナーの呼び込みを手伝ったり、励ましたりする。	お世話になった人達を招待して、感謝の気持ちを伝えることができる。 【思考・表現】 自分が身近な人々と、かかわっていることを分かっている。【気付き】	(3) 友達の家族 - (4) 地域 -
	4. フェスティバルの感想を話し合ったり、作文や絵に表現する。	○子どものこれまでのがんばりを賞賛する。	フェスティバルを終えた後の感想や思いを表現できる。【思考・表現】 発言分析、行動観察 作品分析	(1) 友達 - (2) 教師 - (4) 地域 -

5 本時の展開 (15 / 21)

(1) ねらい

リハーサルを楽しみながら、自分や友達のよかったところやもっと工夫したらよいところに気付き、伝え合うことができる。

(2) 授業仮説

リハーサルを学び合いの場として、自分や友達のよさに気付き伝え合うことにより、かかわる力が身に付くであろう。

(3) 本時の展開

時間	学 習 活 動	支 援	評価方法
5分	1. きょうのめあてと活動を確認する。 自分や友だちのよかったところを見つけて、本番がせいこうできるように、気づいたことをつたえ合おう。	・フェスティバルを成功させるためのリハーサルであることを確認する。 ・遊びの後に友達やグループの作品及び出し物のよい点や工夫した方がよい点について話し合うことを確認しておく。	

20分	2.リハーサルスタート A グループ出演(旗頭, 獅子舞, エイサー, コンサートグループが, 演技する。 B グループ出演(あそび, 食べ物, ムーチャー, モノレールグループが出店する。	・ 友達のよい点や工夫した方がよい点を見つけてあげるよう助言する。 ・ 各グループの演技を見たり, お店をまわりながら, 友達のよい点に気づいた子どもをほめ, 他の子へも気づきのよさを知らせる。 ・ 演技するグループによっては, 見学するグループの偏りがないような言葉かけで配慮する。	行動観察 表情 つぶやき
5分	3.活動を振り返る。 ○ 友達のよかった点・・・GOOD ● 工夫した方がよい点・・・アドバイスとして, それぞれのワークシートに記入する。	・ リハーサルを思い出し, 各グループで, お互いの意見を出し合いながらよい点や改善点をワークシートに書かせる。	発言 ワークシート
10分	4.よかった点やアドバイスしたい点についての発表をする。 ・ 各グループごとに, 相談しながら書いたワークシートをもとに, 発表する。 ・ コメントをもらったグループは, お礼の言葉やもらった感想を言う。	・ 聞きながらメモがとれる子は, 「忘れないように書いていいよ。」と助言する。 ・ 8つの全グループが, コメントをもらえるよう, 言葉かけをして配慮する。	
5分	5.各グループで今日の活動を振り返り, 相談して次の計画を立てる。	・ コメントに対しては, 次時の活動へ生かせるよう, 励ましの言葉かけをする。	行動観察 つぶやき

(4)評価

- ・ 友達と協力して楽しく活動しようとしている。
- ・ 友達のよかったところやもっと工夫したらよいところに気づき、伝えてあげようとしている。

結果と考察

検証

具体的な活動や体験を通して、学習活動の展開の工夫を図れば、身近な人々とかかわる力が身に付くであろう。

【手立て1】フェスティバルの計画・準備, リハーサル及び本番を学年全体で行い, 友達同士や教師とかかわらせる。

【結果】図1にあるように, かかわりを4つの視点に広げ身近な人々とかかわる力を具体化した。「(1)自分と友達のかかわり」「(2)自分と教師のかかわり」を身に付ける活動として, 話し合いや準備, リハーサル等を学年全体で行った。単元終了時の事後アンケート, 子どもの学習の様子及びワークシートから検証する。

表3 事後アンケート

問:「さつきのじまんフェスティバル」が終わりましたが, ふりかえってみてどう思いますか

(平成17年12月20日実施 人数27人)

(1)「自分と友達のかかわり」について

- ・ 「魚に色を付けた方がきれいだよ」ってアドバイスしました。
- ・ 友達に, 「遊びのルールは見えるように大きく書いた方がいいよ」とアドバイスをもらいました。

(2)「自分と先生のかかわり」について

- ・ 先生から上手なあの当て方の説明を聞いてできるようになったことがうれしい。
- ・ わたあめをどうやって作っていいか分からなかったけど, 先生に「教えて下さい。」とたずねて一緒に作ってくれたことがよかった。

- ・友達が「このムーチャー，おいしいね。」って言うてくれたので「ありがとう」って言いました。
- ・みんなと力を合わせれば，フェスティバルはせいこうさせられることがわかった。
- ・1年生に「つりざおは，ふりまわさないでね。」って，やさしく教えてあげました。
- ・ぼくは，先生の質問したことに「招待客は，大人はしごとがいそがしいので1年生がいいと思います。」とはっきり答えました。
- ・旗頭のグループの名前で，先生に「なぜ，“なかよしさつきの大しぜん”という名前にしたの？」と質問されて「さつき小には緑の自然がいっぱいあるからです。」と答えました。



写真1 リハーサルで，友達同士相互交流している様子



図3 H児アドバイスカード

【考察1】事後アンケート（表3）の「自分と友達のかかわり」項目では，子どもの回答から，自分と友達のかかわる力が身に付くことにより，（1）— 友達のよさに気づき，伝えてあげられることもわかった。さらに，1年生に対して，身に付けさせたいかかわる力の（1）- 優しく接することが身に付いたことがわかる。次に，「自分と教師のかかわり」の，子どもの回答から，身に付けさせたいかかわる力の（2）- 先生の質問に対してはっきり答えることが身に付いたと考える。

また，リハーサルで互いのよかった点を「GOOD」逆に工夫した方がよい点を「アドバイス」として，相互交流の場を設けた。抽出児Hのアドバイスカード（図3）と抽出児SのGOODカード（図4）から「自分と友達のかかわる力」がついたことを見取ることができた。

抽出児H（写真1）は，アドバイスカード（図3）で，「ぼくがアドバイスしたいことは，わりばしをペットボトルにくっつけたほうがよかったと思います。」のように，友達に工夫した方がよい点に気づき伝えることができる力が身に付いたと考えられる。

また，GOODカード（図4）から，「ゆうたさんのおかげ



図4 S児GOODカード

ですぐにもとにもどったよ。」のように、友達のよい点に気付き、伝えてあげることができる力が身に付いたと考えられる。

さらに、事後アンケート（表３）の子どもたちの回答から、「自分と先生のかかわり」項目で身に付けさせたいかかわる力の（２）－ 先生の話をしっかり聞くや 先生に分からないことをはっきり質問する及び 先生の質問に対してははっきり答える力が身に付いたことがわかった。

「さつきのじまんフェスティバル」を学年全体で取り組むことにより、子ども同士協力し、互いのよさを認め合うことで友達同士のかがわりが深まった。

また、教師に消極的な態度で接していた子どもが本単元を通して、積極的にかかわろうとする力が身に付いたことがわかった。

【手立て２】フェスティバルの準備及び本番で、友達の家族や地域人材とかかわらせる。

【結果】本単元は、体験重視の活動であるが、教師の支援だけでは活動の広がりや深まりに限度がある。そこで、子どもたちの思いや願いを実現するための必要な人材を活用することで、獅子舞、エイサー、旗頭及び多様な出し物の体験学習を取り入れた学習活動の工夫を図った。

また、ここでは「（３）自分と友達の家族のかかわる力」「（４）自分と地域の人々のかかわる力」を身に付ける活動として、自分や友達の家族及び地域の人々と意図的にかかわらせた。

そこで、事後アンケート、単元前後の意識調査及び子どもたちの日記から検証する。



友達の母親とムーチー作りをしている様子



青年会の方と竿の持ち方を練習している様子

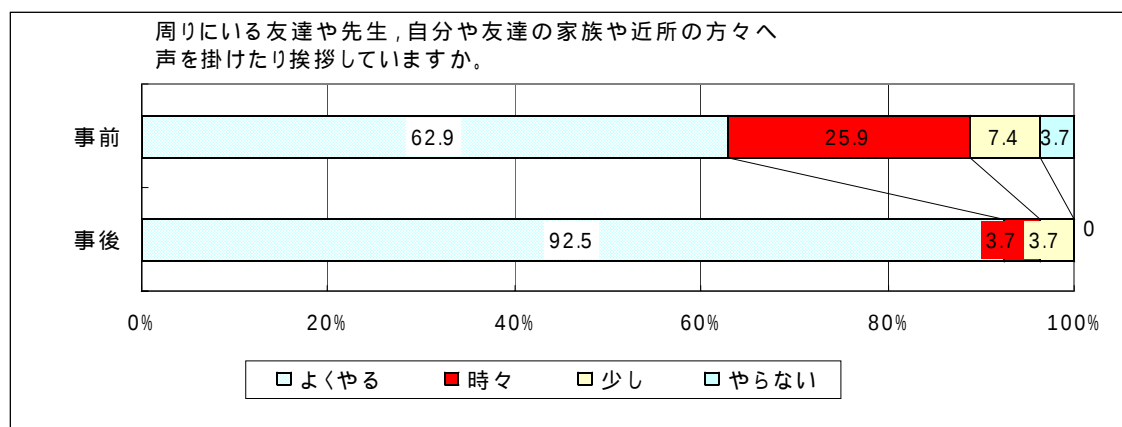


獅子舞保存会の方と着付けの練習をしている様子

表４ 事後アンケート

「かがわり」についての事後アンケートより（平成１７年１２月２０日実施 人数２７人） 問：「さつきのじまんフェスティバル」が終わりましたが、ふりかえってみてどう思いますか	
（３）「自分と友達の家族のかかわり」 について	（４）「自分と地域の人々のかかわり」 について
・ムーチーを作るとき、お母さん達に「おはようございます。」と言えた。	・獅子舞の練習を始める前に、教えてくれる人や獅子頭に向かって「よろしくおねがいします。」と、きちんと正座してあいさつできました。
・「ムーチーの作り方を教えて下さい。どんなふうにするのですか？」と友達のお母さんに質問しました。	・私は、公民館の方に「エイサーの手回しの仕方を教えて下さい」と元気よく言いました。
・旗頭の飾りを作っていたら、友達のお父さんに設計図の書き方を習ってやる気が出た。	・青年会のお兄ちゃんたちがやさしく旗頭の持ち方を教えてくれて、いっしょに飾りもつけてくれたことがよかったです。
・友達のおばあちゃんに「お茶をどうぞ」と言えたことがうれしいです。	

平成17年12月20日実施 調査人数27人



今までと比べてだれとどのような声かけやあいさつができるようになりましたか。

- ・となりの家のおばさんに勇気を出してあいさつできた。
- ・朝、「おはようございます。」と近所のおじさんやおばさんに言うようになった。
- ・しんせきのおじさんたちが「大きくなったね」と言ってくれたとき「はい、ありがとうございます。」と言えた。
- ・となりの家の人としゃべれるようになった。
- ・学校の門で旗を持つおばさんに「おはようございます。」と言えた。
- ・朝と夜ねる前に家族のみんなにあいさつするようになった。
- ・お父さんに「いってらっしゃい」と言うようになった。
- ・12月の初めから学校に行くときに「いってきます」とお母さんやお父さんにあいさつするようになった。

図5 授業終了後の大人とのかかわりについての意識調査

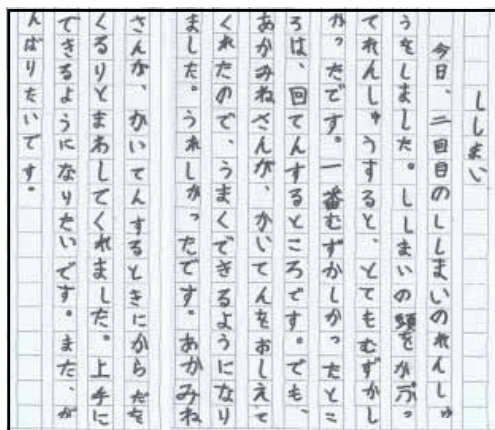


図6 M児の日記(2回目)



図7 M児の日記(最後)

【考察2】本研究を通してめざす子ども像は「身近な人々と積極的にかかわる子」である。消極的だった子どもが、これまでの活動を生かして身近な人々と積極的にかかわるだろうと考えるからである。表4事後アンケートの「自分と友達の家族のかかわり」について子どもの回答から、友達の家族とかかわることで、活動する意欲が高まり、「自分と友達の家族のかかわり」の(3) - 困ったときははっきり質問することや、作り方を習いながら、一緒に作ったり、練習したりすることができる力が身に付いたことがわかった。

また、図5「大人とのかかわり」についての意識調査から、本単元前に比較して「自分の身近にいる人々へよく声かけしたり、あいさつをよくするようになった」子どもが62.9%から92.5%に増えており、さらに全員が挨拶するようになってきている。

さらに、「以前より身近な人々へ挨拶や声かけができるようになりました」の問いに対して、子どもは「学校の門で旗を持つおばさんに『おはようございます。』と言えた」や「近所のおじさんおばさんに『おはようございます。』というようになった」等、回答があった。このことは、子ども自ら積極的に身近な人々にかかわっていることがわかり、身に付けさせたいかわる力の「自分と友達の家族のかかわり」(3) - 自分や友達の家族に進んで挨拶する、「自分と地域の人々」(4) — 地域の人へ元気よく挨拶する力が身に付いたと捉えられる。

また、抽出児Mの日記1より獅子舞の2回目の練習に、「赤嶺さんが回転するときに体をくると回してくれました。上手にできるようになりたいです。」と、身近な人々とかわる力の「自分と地域の人々」(4) — 地域の人に教わりながら、一緒に活動できることが身に付いたことがわかる。

さらに、日記2の「金城さんや赤嶺さんにおそわってこんなに上手にできたことを見せたいです。」のように、身近な人々とかわる力の(4) — 地域の人によさに気づき、伝えることが身に付いたと考えられる。

これらのことから、教師が本単元で子どもを友達の家族や地域の人々と繰り返しかわらせたことで、身近な人々のよさに気づき積極的にかかわろうとする力が身に付いたと捉えられる。

研究の成果と課題

1 成果

- (1) 本単元を学年全体で取り組んだことで、子ども同士が協力しあい積極的に活動する意欲が芽生え、互いのよさを伝え合う等、友達同士のかかわりが深まった。
- (2) 「さつきのじまんフェスティバル」を通して、教師が子どもを身近な人々（友達、教師、友達の家族、地域の人々）にかかわらせたことで、自ら進んで挨拶や質問をする等、積極的にかかわる力が身に付いた。
- (3) 地域の人材を生かし、繰り返しかわらせる学習活動の展開の工夫を図ったことで、地域の人々のよさに気づき、地域に愛着が芽生え始めた子どもが増えてきた。

2 課題

- (1) 学年全体で活動した際のグループ活動における評価の工夫
- (2) 生活科において「身近な人々とかわる力」を育む年間指導計画の工夫

《主な参考文献及び引用文献》

文部省 小学校学習指導要領解説 生活編	日本文教	2004
観点別学習状況の新評価基準表」 北尾倫彦・万代る里子編集	図書文化	2003
実践から作る生活科の新展開 嶋野道弘編著	東洋館出版社	1999
生活科・総合的学習重要用語300の基礎知識 寺尾慎一編集	明治図書	1999
生活科事典 編集 中野重人・谷川彰英・無藤 隆	東京書籍	1996